

真鶴町立まなづる小学校

研究テーマ：粘り強く学ぶ子の育成
～読みの視点を活用できる授業づくりをめざして～

1 実践の目的

児童が学習課題に粘り強く取り組んだり、協働的に学びを深めたりすることができるよう、その基盤となる「読解力」の育成をめざす。そこで様々な文章を読む力を育む教科である国語科を対象とし、次の3点に焦点化した研究を進めることとした。

- ①読みの視点の明確化・共有化
- ②語彙力の育成
- ③読書活動の推進

これらの焦点化した内容を追究することにより、児童が、学習課題に沿って大切な言葉を押さえながら正しく文章を読めること、想像を広げて読み深めること、課題解決のために繰り返し文章を読むこと、といった具体的な読解力を身に付けることができ、本研究がめざす「粘り強く学ぶ子」の育成につながると考えた。このことから、本校では3年計画での研究を推進している。

2 実践の内容

(1) 校内研究の体制

今年度は3年計画の最終年となる3年目の研究にあたり、次の内容を深めていきたいと考えた。

- ・「読みの視点」の習得・活用・定着を図り、児童が課題解決や対話を楽しむこと。
- ・単元計画や年間カリキュラムの工夫により児童が主体的に学習に取り組めること。
- ・教科書教材「言葉の宝箱」等を活用して児童の語彙を増やすこと。
- ・授業に合わせた並行読書や学校司書との

連携を充実させることで、児童の読書活動を推進すること。

上記を追究するため、教員は説明文と文学作品の2つのブロックの1つに所属し、各自年間1本の授業提案(全体研・ブロック研のいずれか)を行うこととした。

なお、この研究の理論的な部分をご指導していただくために、前年度に引き続き、山梨大学大学院総合研究部教授の茅野 政徳(かやの まさのり)先生を招聘し、「読みの視点」を明確にした授業のあり方についてご教授いただいた。

(2) 研究授業の様子

今年度実施した授業提案の中から、説明文ブロックの実践を紹介する。

【説明文】5年1組

単元名：「学んだことと自分のことを結びつけて、情報モラルパンフレットをつくろう」

教材名：「想像力のスイッチを入れよう」

単元で扱う読みの視点：

「題名」、「はじまりの工夫」

「カギことば」、「文章構成」「主張」

「事例」「結論の広がり」

本単元では、「はじめ」「中」「終わり」という文章構成に加えて、筆者が読者に効果的に伝えるために取り入れた表現や構成の工夫について、児童が学習することをねらいとしている。

実際の学習では、学習したことを生かした「パフレットづくり」をゴールとすること

で、活動に主体性をもたせ、児童が自ら読みの視点に着目して読むように展開を図った。研究授業では、筆者の示した事例を分類するために、それに類似する児童の日常にあるような出来事を事例として示すことで具体的なイメージをもてるような手立てがとられた。

今年度も授業提案の後は、全教員が参加して研究協議を行った。また、各回茅野先生が指導主事を招聘し、実践に基づく具体的なご指導をいただいている。

3 実践の成果と課題

(1) 子どものアンケートから

児童へのアンケートを5月と1月に実施した。アンケートでは次の内容を児童に調査した。

- ①「先生はわたしのよいところを認めてくれている」
- ②「授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる」
- ③「学習した内容について、わかったことやよくわからなかったことを振り返り、次の学習につなげている」

顕著であった変容は、①の質問に対し、「当てはまる」と回答した児童の割合が66%から71%と5ポイント上昇した点である。特に1月のアンケートでは「どちらかと言えば当てはまる」と答えた児童の数も加えれば、100%となっている。

なお、②の質問(当てはまる28%→29%)③の質問(当てはまる24%→23%)については、ほぼ横ばいという結果であった。

しかし、令和6年度の2月に実施したアンケートと比較すると、②では【16%→29%】、③では【13%→23%】と両方の質問とも10ポイント以上の上昇が見られた。

(子どもの変容)

アンケートの質問項目①の結果に表れたように、全ての児童が教師の働きかけにより、自己肯定感を満たすことができていると捉えることができる。校内研究と関連して振り返ると、国語の学習課題に対して粘り強く主体的に取り組む児童の姿が昨年度よりもさらに増えたと感じている。具体的には、「読みの視点」が話し合いの話題になったり、自らの考えを導きだす根拠になったりと、児童自身が活用し、理解や考察につながられるようになった。

(教師の変容)

研究の3年目ということで、教師にも「読みの視点」を取り入れた授業づくりについての考え方や指導方法についての理解が進んできた。だからこそ、それらを活用した児童の主体的な学びを実現したいという欲求が生じ、日常の授業づくりでも工夫と改善が見られるようになってきた。特に若手教員に意識の高まりが表れ、それが全体的な底上げにつながっている。

4 今後の展開

3年間、国語科を切り口に本研究テーマの実現に向けた研究を進めてきた。成果と課題に記したとおり、児童と教師の両者にとって、国語の読み取りに関する学習はとても有意義で、プラスの変容も表れてきた。だがその一方で、他教科(特に算数科)での理解度に個人差が大きく表れている課題もあり、国語の指導方法を研究するだけよいのかという意見もある。現時点ではまだ研究対象の教科を定めていないが、どの教科が切り口となっても、育てたい児童の姿をめざして指導方法を探究するスタンスは不変であることを確認している。これまでの研究を土台に新たな研究がスタートする。